

資料紹介

同志社大学文化情報学部蔵無名歌集

—翻字と解題(4)—

福田 智子・穂満 建等

同志社大学文化情報学部蔵無名歌集（仮称『いろは和歌集』）は、和歌を句頭の文字によって、いろは順に分類・配列した歌集である。本稿では、歌頭が「の」「く」「や」「ま」「け」「ふ」「こ」「え」「て」の歌、計 180 首について、『新編国歌大観』を対象に他出歌集を検した。その結果、『古今集』『新古今集』などの勅撰集歌だけでなく、『拾玉集』などの六家集（秋篠月清集・長秋詠藻・山家集・拾玉集・拾遺愚草・壬二抄）に採られている歌が多く見られ、また、『伊勢物語』『源氏物語』の物語和歌が採られているといった、前稿までと同様の傾向が看取された。出典未詳歌は 6 首ある。そのうち「け」の歌 2 首は連続しており、また、「え」「て」の歌はそれぞれ歌群末尾に配されている。なお、異文傍書の中には、出典と目される歌集において、当該歌の近くに配されている他の歌の句を、目移りにより誤って記したと推定される箇所がある。異文を記入する際に、出典歌集を参看していた可能性が指摘される。

1. はじめに

本稿は、福田智子・児玉駿介・加藤みどり「資料紹介 同志社大学文化情報学部蔵無名歌集—翻字と解題(1)—」(『文化情報学』第9巻第1号、2013年10月)、同「資料紹介 同志社大学文化情報学部蔵無名歌集—翻字と解題(2)—」(『文化情報学』第9巻第2号、2014年3月)、福田智子・久野由香子・村田冴子「資料紹介 同志社大学文化情報学部蔵無名歌集—翻字と解題(3)—」(『文化情報学』第10巻第1、2号、2015年3月)の続編である。

これまで、歌頭が「い」から「う」までの歌(「ろ」「へ」「り」「る」「ら」の歌はない)、計 501 首について、『新編国歌大観』を対象に他出歌集を検したが、本稿では引き続き、「の」「く」「や」「ま」「け」「ふ」「こ」「え」「て」の歌(「ゐ」の歌はない。また、「お」の歌は「を」の箇所既に既出)、計 180 首(「く」「や」「こ」各 30 首。また、「え」3 首、「て」7 首。それ以外は各 20 首。五十一丁裏から六十九丁表にあたる。)について、同様の翻字と考察をおこなう。

2. 翻字

【凡例】

- ①和歌本文の歌頭には、(1: い 1) というように、歌集全体の通し番号と、歌頭の文字ごとの通し番号を付す。
- ②本文の表記は、できるかぎり原態を生かして、通行の字体に翻字するよう努めた。歴史的仮名遣いに統一したり、私に濁点を付したりすることは避けた。
- ③和歌の頭注と脚注の位置に記される集付と作者名は、和歌本文の後に、(頭注/脚注)の順で示す。なお、どちらか片方しか記されない場合は、記述のないことを示す記号として「—」を用いる。
- ④他出歌集の調査範囲は、『新編国歌大観』に拠り、巻数-通し番号を付した歌集名の略称と歌番号を示す。
〈例〉3-19 貫之 355『新編国歌大観』第三巻 19 番目の『貫之集』355 番歌
- ⑤本書と他出との間に、本文異同(表記の異同は除く)のある場合は、▽を付して異同を句

ごとに挙げ、歌集名と歌番号を示す。

- ⑥本書の和歌本文に見セ消チ・挿入記号・傍書などの書き入れがあった場合は、〔本文注記〕の項目を設け、説明を加える。なお、傍書が見セ消チや挿入記号とともに記されている場合は、書き入れ修正後の本文を掲げる。

【翻字】

(502：の1) 残りなく 筆になにかは ますかゝみ
手に把て見ぬ いにしへもなし
▽〔しるしおく〕 8-35 雪玉 3044

(503：の2) 野邊にをく 露の名残も 忍はれぬ
あたる秋の わすれかた見に
5-278 自讃歌 53、10-123 新三撰 184、▽〔霜がれぬ〕 1-10 続後撰 481、▽〔霜がれぬ〕〔わすれがたみは〕 5-197 千五百 1709

(504：の3) 長閑なる 春のひかりに 松嶋や お
しまの壺も 袖やはすらん (月清抄/後京極)
3-130 月清 711、4-31 正治初 415、▽〔をじまのあまの〕1-15 続千載 42、6-11 雲葉集 212、▽〔春のひかりを〕〔をじまの海士の〕 2-16 夫木 1712

(505：の4) 軒ちかき 桜のすゑに かせすきて
匂ひにさむる 春の夜の夢 (月清抄/後京極)
▽〔むめのこずゑに〕 3-130 月清 110、2-13 玄玉 460

(506：の5) のき近き 花たちはなの 夕風に 萩
ふく秋の 暮は物かは (拾玉抄/慈圓)
3-131 拾玉 828

(507：の6) 野か山か はるかに遠き 鹿の音を
秋のね覚に きゝ明しつゝ (月清抄/後京極)
▽〔ききあかしつる〕 3-130 月清 131

(508：の7) 野邊毎に こほるゝ秋の ゆふ露を
さながら袖の ものになしつゝ (拾玉抄/慈圓)
▽〔物となしつる〕 3-131 拾玉 1049

(509：の8) 軒近き 山の下萩 こゑたてゝ ゆふ日
かくれに 秋かせそふく (壬二抄/家隆)
3-132 壬二 629、5-217 家隆合 54、5-225 両卿
撰 20、2-16 夫木 4482、▽〔山下萩の〕 1-19 新
拾遺 1592、6-27 六華集 594、6-31 題林愚 3469

(510：の9) のきはより まかきの草に かたかけて
風をかきりの さゝかにのいと (月清抄/後京極)
2-16 夫木 13124、▽〔ささがにのやど〕 3-130
月清 279、▽〔引きかけて〕 6-27 六華集 1812

(511：の10) のこりなく 吾くろかみは うつもれぬ
霜ののちにも 松は見えけり (拾遺愚抄/定家)
3-134 拾員外 570、2-16 夫木 6581

(512：の11) 軒の雨になり行袖の 雫かな こゝろ
の雲や そらにみつらん (拾玉抄/慈圓)
3-131 拾玉 4431

(513：の12) 野邊見れば 尾花かもとの おもひ草
かれ行冬になりそしにける (新古今/和泉式部)
1-8 新古今 624、10-177 定家八 519、▽〔かれ
ゆく程に〕 3-73 和泉集 276

(514：の13) 野邊の露 うら葉のなみを かこちても
行ゑもしらぬ 袖の月かけ (同/家隆)
3-132 壬二 1688、▽〔うらわの浪を〕 1-8 新古
今 935、4-41 御五十 600、5-217 家隆合 175

(515：の14) の邊はいまた あさかのぬまに か
る草の かつ見るまゝに しけるころかな
1-8 新古今 184、4-15 明日香 1013、10-181 歌
枕名 6894、▽〔野べはまだ〕 5-261 最勝四 448

(516：の15) の邊毎に をとつればたる 秋風を
あたにもなひく 花すゝきかな
1-8 新古今 350

(517：の16) 野分せし をのゝ草ふし あれはてゝ
深山にふかき さほしかの聲 (新古今/寂蓮法師)
1-8 新古今 439、4-31 正治初 1654、10-177 定
家八 412、4-10 寂蓮 237、▽〔み山に帰る〕 10-
185 三百六 244

(518：の17) 野原より 露のゆかりを 尋きて
わか衣手に あきかせそふく
1-8 新古今 471、4-18 後鳥羽 1243、6-31 題林愚
3236、10-122 三六合 1、10-177 定家八 359

(519：の18) の邊の露は 色もなくてや こほれ
つる 袖よりすくる おきのうは風 (新古今/慈圓)
1-8 新古今 1338、3-131 拾玉 4835、3-131 拾玉

4948、5-194 水無瀬 22、5-195 若宮建 17、5-196 桜宮合 17、5-278 自讃歌 33、5-303 無名抄 32、10-123 新三撰 162、10-177 定家八 1288

(520: の 19) の邊毎に 花のたもとの しほるれは 露にそみゆる あきのあはれは
3-131 拾玉 3006、5-177 慈鎮合 12

(521: の 20) 法の門に こゝろを入れて おもふかな たゝうき世をは 出へかりけり
1-16 続後拾 1274、3-131 拾玉 901、5-177 慈鎮合 152

(522: く 1) 雲にまかふ 花のさかりを おもわせて かつ 霞む みよし野の山 (山家抄 / 西行)
3-126 西行家 14、3-127 聞書 51、5-173 宮河合 9

(523: く 2) くらきより くらき道にそ 入ぬへきは かるかにてらせ 山のはの月 (一 / 和泉式部)
1-3 拾遺集 1342、2-7 玄玄 129、2-8 新撰朗 561、3-73 和泉集 150、3-73 和泉集 834、5-53 後十五 4、5-153 相撲立 7、5-223 時代不 295、5-270 後六々 10、5-293 童蒙 518、5-301 古来風 389、5-306 西行談 43、5-375 古本説 23、5-376 宝物 564、5-377 発心集 29、5-381 世継語 17、5-388 沙石 151、5-444 無名草 89、6-5 麗花集 123、10-177 定家八 1809、10-124 女房合 51

(524: く 3) 紅の ひと花ころも うすくとも ひたすらくたす 名をしたてすは
5-421 源氏 81

(525: く 4) 熊野河 くたすはや瀬の みなれさほ さすか見なれぬ 波のかよひち (新古今 / 太上天王)
1-8 新古今 1908、10-177 定家八 1771、10-181 歌枕名 8403

(526: く 5) くやしくそ 月と花とに なれにける 弥生の空の あり明のころ (月清抄 / 後京極)
3-130 月清 618、▽ [はなと月とに] 1-10 続後撰 162、6-31 題林愚 1542

(527: く 6) 紅の うす花さくらほの ーと あさ日いさよふ おはつせの山 (壬二抄 / 家隆)
6-20 拾遺風 27、6-27 六華集 153、▽ [紅に] 3-132 壬二 2100、▽ [朝日ににほふ] 5-309 先

達物 5

(528: く 7) 雲まよふ 夕にあきを こめなから 風もほに出ぬ おきのうへかな (新古今 / 慈圓)
[本文注記] 結句「おきのうへかな」の「うへ」の右に「イ上風」あり。
1-8 新古今 278、3-131 拾玉 2995、5-177 慈鎮合 133

(529: く 8) 雲はみな はらひはてたる 秋風を 衾にのこして 月を見るかな (同 / 後京極)
1-8 新古今 418、3-130 月清 925、5-184 老若合 254、5-278 自讃歌 23、5-304 瑩玉集 12、6-16 和漢兼 679、10-123 新三撰 85

(530: く 9) くらき夜の 窓うつ雨に おとろけは 軒はの松に 秋かせそ吹 (月清抄 / 後京極)
1-21 新続古 1751、3-130 月清 1229、5-178 後京極 63、5-183 三百六 302

(531: く 10) くまもなく さえ行月を 見るほとや 身のうき雲の 晴まなるらん (拾玉抄 / 慈圓)
3-131 拾玉 249

(532: く 11) くるしさは おとらし物を あなかに いとふこゝろも こふるこゝろも (同 / 同)
3-131 拾玉 394

(533: く 12) 暮はつる 夕の空を なかむれは 雲こそ秋の 名残なりけれ (長秋抄 / 俊成)
3-129 長秋 260、6-31 題林愚 4844、▽ [暮れわたる] 2-13 玄玉 432

(534: く 13) 草の原 小篠かすゑも 露ふかし おのかさま ー 秋たちぬとて
3-133 拾遺愚 337

(535: く 14) 雲となり 雨となりてや 立田ひめ 秋のもみちの 色をそむらん (長秋抄 / 俊成)
1-11 続古今 514、3-129 長秋 552、5-183 三百六 413、6-11 雲葉集 672

(536: く 15) 草かれの あしたの原に 風過て さえ行そらには つかりのなく (拾遺愚抄 / 定家)
3-133 拾遺愚 444

(537: く 16) 草も木も さそなあらしの 山風に
ひとりしほれぬ おきの音かな (壬二抄/家隆)
〔本文注記〕初句・第二句「草も木も さそなあらしの」の右に「雲もかゝらぬ月を見るかなイ」あり。
2-16 夫木 4483、3-132 壬二 1762、10-137 道五十 469

(538: く 17) くさふかき 霞の谷に 身をかくして
る日の暮しけふにやはあらぬ (同/同)
▽〔影かくし〕1-1 古今 846、5-235 新時代 27、
5-264 和十種 10、10-181 歌枕名 1096、10-212
源氏注 1779、▽〔かすみの下に〕〔かげかくし〕
10-177 定家八 649

(539: く 18) 暮る野も 契りはかなき 秋風に
いなつままねく 花すゝき哉 (同/同)
3-132 壬二 1617、2-16 夫木 4366

(540: く 19) 雲はねや 月はともし火 かくしても
明せはあかす さやの中山 (月清抄/後京極)
▽〔かひがねや〕10-181 歌枕名 5013、▽〔あかせばあくる〕〔さよの中山〕2-16 夫木 16893、▽〔かくてしも〕〔あかせばあくる〕3-130 月清 782、▽〔雲もねや〕〔あかせばあくる〕4-31 正治初 486

(541: く 20) 草枕 なみたかきあえぬ ね覚かな
鳴の羽音に 夢を残して (拾玉抄/慈圓)
3-131 拾玉 1845、2-16 夫木 16927

(542: く 21) くらへこし ふりわけかみも かた
すきぬ 君ならすして たれかあくへき (伊勢物語/有常むすめ)
5-415 伊勢語 48、10-212 源氏注 1590

(543: く 22) 暮は又 わかやとりかは たひ人の
かち野の原の あきの下露
▽〔はぎのしたつゆ〕1-9 新勅撰 534、5-213 建保
合 103、10-181 歌枕名 6071

(544: く 23) くもりなく 千とせにすめる 水の面に
やとれる月の かけものとけし (新古今/紫式部)
1-8 新古今 722、3-72 紫集 87

(545: く 24) 草も木も ふりまかへたる 雪の日に
春まつ梅のはなの香ぞする (新古今/通具)
▽〔雪もよに〕10-206 歌林良 410、1-8 新古今

684、5-197 千五百 2045

(546: く 25) 雲はれて のちもしくるゝ 柴のとや
山風はらふ はるのした露
▽〔松のした露〕1-8 新古今 573、4-11 隆信 247、
6-31 題林愚 5012

(547: く 26) 暮かゝる むなしき空の 秋をみて
おほえすたま 袖の露かな (月清抄/後京極)
〔本文注記〕第二句「むなしき空を」の「を」
見セ消チ。右傍書「の」あり。第三句「秋にみて」
の「に」見セ消チ。右傍書「を」あり。
1-8 新古今 358、3-130 月清 526、5-178 後京極
53、▽〔秋を見し〕3-131 拾玉 1758

(548: く 27) 雲みなる かりたになきて くる秋に
なとかは人の をとつれもせぬ (新古今/延喜)
1-8 新古今 1416

(549: く 28) 暮て行 春のみなとは しらねとも
霞におつる 宇治の柴ふね
1-8 新古今 169、4-10 寂蓮 284、5-184 老若合 89、
5-223 時代不 224、10-177 定家八 186、10-181 歌
枕名 285

(550: く 29) くすの葉に あらぬ我身も 秋風の
吹につけても うらみつるかな
▽〔ふくにつけつつ〕1-8 新古今 1243、▽〔吹くにつけつつ〕〔うらみられけり〕7-11 村上 87

(551: く 30) 紅に なみたの色の なりゆくを
いくしほまてと 君にとははや (新古今/道因法師)
〔本文注記〕第二句「なみたの色の」の「なみた」
の右に「もみちイ」あり。
1-8 新古今 1123、5-169 右大治 44

(552: や 1) 山里に うき世いとはん 友もかな
くやくし過し 昔しかたらん (新古今/西行)
1-8 新古今 1659、5-277 定十体 178、5-278 自讃歌
170、5-326 愚見抄 26、5-328 三五記 133、5-385
撰集抄 24、5-386 西行文 154、10-177 定家八
1715、▽〔人もがな〕3-126 西行家 547

(553: や 2) 山のはの こゝろもしらて 行月は
うはの空にて 影やたえなん (源し/夕かほ)
5-421 源氏 33、5-249 物語合 23、10-102 源氏

合 72

(554: や 3) やくとのみ 枕のうへに しほたれて
けふりたえせぬ 床のうらかな (—/ さかみ)

1-4 後拾遺 814、10-180 五代枕 1129、10-181 歌
枕名 9622、▽ [枕の下に] 10-177 定家八 1194

(555: や 4) 山里に ひとりなかめて おもふかな
世にすむ人の こゝろつよさほ (新古今/ 慈圓)
[本文注記] 結句「こゝろつよさほ」の「さほ」
の右に「イきを」あり。

1-8 新古今 1658、3-131 拾玉 1867、10-177 定
家八 1714、▽ [心づよさよ] 6-27 六華集 1782

(556: や 5) 山里の 風すさましき 夕くれに 木
の葉みたれて 物そかなしき (同/ 秀能)

1-8 新古今 564、5-202 春日合 30、5-273 続歌仙
97、5-278 自讃歌 153、6-31 題林愚 5059、7-81
如願 547、10-123 新三撰 354

(557: や 6) 山里は 冬そさひしさ まさりける
人めも草も かれぬとおもへは(古今/ 源宗于朝臣)

1-1 古今 315、2-4 古六帖 983、2-6 和漢朗 564、
3-17 宗于 15、5-22 陽成一 6、5-166 俊成合 68、
5-235 新時代 56、5-267 三十六 97、5-275 百
人秀 21、5-276 百人首 28、5-325 和歌用 31、
5-329 桐火桶 117、10-177 定家八 508、▽ [冬ぞ
わびしさ] 2-4 古六帖 3570

(558: や 7) やよ時雨 ものおもふ袖の なかりせは
木の葉の後に なにをそめまし

1-8 新古今 580、3-131 拾玉 1789、5-277 定十体
181、5-328 三五記 145、6-27 六華集 953、6-31
題林愚 4935、7-74 無名 21、10-177 定家八 501、
10-206 歌林良 289、10-210 古今注 278、▽ [物
思ふ袖] [木の葉ののちは] [何を染めまし] 10-
185 三百六 301

(559: や 8) 山河に かせのかけたる しからみは
なかれもあえぬ もみちなりけり(古今/ 春道つらき)

1-1 古今 303、2-4 古六帖 1636、5-275 百人秀 32、
5-276 百人首 32、5-299 袖中抄 826、5-308 詠歌
大 53、10-206 歌林良 619、▽ [ながれもやらぬ]
2-3 新撰和 90、10-177 定家八 467

(560: や 9) 山風は ふけとふかねと しら波の

よする岩ねは ひさしかりけり (新古今/ 伊勢)

1-8 新古今 721、2-4 古六帖 2242、▽ [松風は]
[よする岩ほぞ] [久しかりける] 3-19 貫之 193

(561: や 10) やまかつの かきほにさける あさ
かほは しのゝめならて あふよしもなし

1-8 新古今 344、▽ [みるよしもなし] 2-4 古六帖
1322、▽ [かきねにさける] [あさがほの] 6-27
六華集 622

(562: や 11) 山ふかみ なをかけさむし 春のつき
空かきくもり 雪はふりつゝ

1-8 新古今 24、6-6 御裳集 37、6-31 題林愚 756

(563: や 12) 山ふかみ 春ともしらぬ 松の戸に
たえ へ かゝる 雪の玉水(新古今/ 式子内親王)

1-8 新古今 3、4-1 式子 203、4-31 正治初 205、
5-277 定十体 109、5-278 自讃歌 11、5-328
三五記 220、6-27 六華集 24、10-123 新三撰
71、▽ [のきの玉水] 10-124 女房合 4、▽ [柴
の戸に] 5-329 桐火桶 213

(564: や 13) 山桜 はなの下露風 ふきにけり
木の本ことの ゆきのむらきえ (新古今/ —)

▽ [花の下かぜ] 1-8 新古今 118、▽ [花のした風]
[木のもとごとに] 3-99 康資母 49、▽ [きてみ
れば] [花のした風] 2-12 月詣 200

(565: や 14) やまたかみ 峯のあらしに ちる花の
月にあまきる あけほのゝそら

▽ [あけがたの空] 1-8 新古今 130、4-31 正治初
1919、5-183 三百六 124、10-124 女房合 46、10-
177 定家八 158

(566: や 15) 八重かすみ 春をはよそに見すれと
も あわれをこむる みよし野の山 (拾玉抄/ 慈圓)

3-131 拾玉 704

(567: や 16) 山桜 おもふあまりに 世にふれは
花こそ人の いのちなりけれ (拾玉抄/ 慈圓)

1-20 新後拾 605、3-131 拾玉 1316

(568: や 17) 山さくら 今は咲らん かけろふの
もゆる春へに ふれるしら雪 (月清抄/ 後京極)

▽ [いまかさくらむ] 3-130 月清 810、5-197
千五百 303、▽ [いまかさくらし] 2-15 万代 203、

▽ [いまかさくらん] [もゆるはるひに] 1-10 続後撰 69、▽ [さくら花] [いまかさくらん] [もゆる春日に] 10-206 歌林良 113

(569: や 18) 八橋に みとりの糸を くりかけて
くもてにまかふ 玉柳かな (長秋抄/俊成)
3-129 長秋 217、2-13 玄玉 482、2-16 夫木 811、
10-211 伊勢注 214

(570: や 19) 山人の あとなき谷の ゆふかすみ
こたへぬ花に 匂ふ春かせ (拾遺愚抄/定家)
3-133 拾遺愚 1841、4-42 仙五十 78

(571: や 20) 山のは、霞はてたる しの、めの
うつろふ花に のこる月かけ (同/同)
3-133 拾遺愚 2163、6-17 閑月集 94

(572: や 21) 山ふかみ 苔のむしろも 旅にして
霜にさえたる 月を見るかな (月清抄/後京極)
▽ [やまふかき] [こけのむしろに] [たびねし
て] 3-130 月清 428

(573: や 22) 八幡山 にしにあらしの 秋ふけは
河なみしろき よとのあけほの (同/同)
3-130 月清 1141、5-199 八幡合 3

(574: や 23) 山のはに あかていりぬる 月かけは
松のあらしに のこるなりけり (拾玉抄/慈圓)
3-131 拾玉 1397、5-177 慈鎮合 201、2-13 玄玉
187

(575: や 24) 山里の た、ひとりねに 夢覚て
鹿もなくなり 庭のまつ風 (同/同)
3-131 拾玉 1437

(576: や 25) 山河を 柴のあみ戸に せきいれて
宿かる月の すかたをそみる (同/同)
3-131 拾玉 5053

(577: や 26) 山里を とへかし人に あはれみせん
露しく庭に やとる月かけ (山家抄/西行)
▽ [すめる月かけ] 3-126 西行家 200

(578: や 27) 山のはに いさよひ出る 久かたの
月ふきこゆる 秋の木からし (壬二抄/家隆)
3-132 壬二 2446

(579: や 28) 山人の くむ谷川の あさほらけ
た、く氷も かつむすひつ、 (月清抄/後京極)
3-130 月清 672

(580: や 29) やま里の 木の葉ふみ分 とふ人も
なかりし庭に 雪はつもりぬ (拾玉抄/慈圓)
3-131 拾玉 554

(581: や 30) 山風の あれにし床を はらふ夜は
うきてそこほる 袖の月かけ (拾遺愚抄/定家)
3-133 拾遺愚 2445

(582: ま 1) またもこん 時そとおもへと たの
まれぬ 我か身にしあれは をしき春かな
1-2 後撰 146、3-19 貫之 901、5-277 定十体 49、
5-329 桐火桶 146、7-5 躬恒 364、7-7 貫之 27、
▽ [をしくもあるかな] 2-6 和漢朗 58

(583: ま 2) まとろまで なかめよとの すさみ哉
あさのさころも 月にうつ聲
1-8 新古今 479、5-189 撰歌合 25、5-273 続歌仙
110、5-278 自讃歌 86、6-31 題林愚 4523、10-
123 新三撰 225、10-177 定家八 385

(584: ま 3) 待よひの たのめぬかねと おとつれて
ななふさひしき とふのすかこも
▽ [ふけにけり] [たのめぬかねの] 5-175 六百番
691、▽ [ふけにけり] [たのめぬかねは] 2-16 夫
木 17106、10-181 歌枕名 7226

(585: ま 4) まこもかる よとのさは水 雨ふれは
つねよりことに まさるわか恋 (古今/つらゆき)
1-1 古今 587、2-4 古六帖 1730、3-19 貫之 575、
10-181 歌枕名 1474、▽ [つねよりもなほ] [ふか
きわがこひ] 10-180 五代枕 1731

(586: ま 5) 枕より またしる人も なきこひを
涙せきあえす もらしつるかな (同/定文)
1-1 古今 670、2-4 古六帖 3231、5-223 時代不 85、
10-177 定家八 981、10-212 源氏注 569、10-212
源氏注 825

(587: ま 6) 待よひの ふけ行かねの 聲きけは
あかぬ別の 鳥は物かは (新古今/小侍従)
[本文注記] 結句「鳥は物かは」の「鳥」の右に「袖
イ」あり。

1-8 新古今 1191、4-3 小侍従 98、5-271 歌仙落
106、5-320 竹園抄 61、5-362 平家延 93、5-363
盛衰記 105、▽ [待つよひに] 2-10 続詞花 565、
7-66 小侍従 42、10-124 女房合 52、▽ [音きけば]
5-319 和歌口 17、▽ [かへるあしたの] 5-361
平家覚 36

(588: ま 7) まとろまて はかなき夢の 見えしより
春の夜はかり うき物はなし (拾遺愚抄 / 定家)
3-134 拾貝外 535

(589: ま 8) まてといふに とまらぬものとし
りなから しいてそをしき 春の別は
1-8 新古今 172、▽ [しひてこひしき] [はるのわ
かれか] 2-2 新撰万 269、▽ [春のわかれを] 5-4
寛平后 32

(590: ま 9) 窓ちかき 竹の葉すさふ 風の音に
いと、みしかき うた、ねの夢
1-8 新古今 256、4-1 式子 315、▽ [竹の葉すさむ]
5-319 和歌口 225、10-206 歌林良 307

(591: ま 10) まとちかき いさ、むら竹 風ふけは
秋におとろく 夏の夜の夢
1-8 新古今 257、5-319 和歌口 226、6-27 六華集
506、6-31 題林愚 2816、▽ [夏の夜の月] 6-16
和漢兼 512

(592: ま 11) まれに来る 夜半もかなしき 松風を
たえすやこけの下にきくらん (同 / 定家)
[本文注記] 六十丁裏 1 行目に下句、10 行目 (最
終行) に上句が記される。それぞれの行末に「○」
印あり。同様の例は、(467: む 26) にも見える。
1-8 新古今 796、5-278 自讃歌 68、10-177 定家八
707、▽ [かりそめの] 7-67 長秋草 197

(593: ま 12) 待人は こゝろ行とも すみよしの
さとにとのみは おもはさらなん (新古今 / 冷泉院)
1-8 新古今 1607、3-94 大式三解 5、5-311 八雲
36、5-332 悦目抄 75、10-181 歌枕名 3943

(594: ま 13) またれつる 入あひのかねの 音すなり
明日もやあらは きかんとすらん (山家抄 / 西行)
1-8 新古今 1808、3-125 山家 939、3-126 西行家
573、5-173 宮河合 59、5-386 西行文 76、10-177
定家八 1634、▽ [こゑすなり] 5-277 定十体 136

(595: ま 14) まはらなる 柴の廬に 旅ねして
時雨にぬるゝ さよころもかな (新古今 / 白川院)
1-8 新古今 579、6-31 題林愚 5008

(596: ま 15) 枕にも 袖にも涙 つらゝ居て む
すはぬ夢を とふあらしかな (同 / 後京極)
1-8 新古今 633、3-130 月清 545、3-131 拾玉
1796、5-178 後京極 102

(597: ま 16) またしらぬ 古郷人は けふまてに
来んとたのめし われを待らん
1-8 新古今 909、2-5 金玉 73、5-52 前十五 20、
5-268 深窓秘 94、6-12 別兼作 451、▽ [けふまでや]
5-270 後六々 140

(598: ま 17) 枕たに しらねはいわし みしまゝに
君かたるなよ 春の夜の夢 (新古今 / 和泉式部)
1-8 新古今 1160、▽ [君にかたるな] 3-74 和泉続
273

(599: ま 18) まとろまぬ かへにも人を見つるかな
まさしからなん 春の夜の夢
1-2 後撰 509、6-27 六華集 1436、10-206 歌林良
479、10-206 歌林良 621、10-213 六花注 180、
▽ [まどろめば] 10-196 色葉和 289

(600: ま 19) 枕とて 草ひきむすふ 事もせし
秋のよとたに たのまれなくに (伊勢物語 / 業平)
1-9 新勅撰 538、2-4 古六帖 3242、3-6 業平 31、
5-415 伊勢語 151、7-2 業平 55、▽ [くさむす
びてし] [こともをし] 2-4 古六帖 2424

(601: ま 20) またしらぬ 野原の末の ゆふつく日
しわしな暮そ 廬さすまで
1-11 続古今 922、▽ [はらののすゑの] 2-15 万代
3390、▽ [はらのの末の] 7-88 信実 198

(602: け 1) 今朝みれは 野分の後 雨はれて
玉そのこれる さゝかにの糸
3-133 拾遺愚 773

(603: け 2) けふの日も 命のうちに 暮にけり
またもやきかん 入相のかね
未詳

(604: け 3) けふまては つれなき道を 三重のをひ

とけてやこよひ 枕ならふる

未詳

(605:け4) 今朝はしも なけきやすらん いた
つらに 春の夜ひとよ 夢をたにみて

▽ [なげきもすらむ] 1-8 新古今 1178、▽ [歎き
もすらん] 3-74 和泉続 575

(606:け5) けふこすは 音羽のさくら いかにと
見る人毎に とはまし物を

1-9 新勅撰 81、3-104 俊忠集 3、10-181 歌枕名 210

(607:け6) けふみれは しとろにみゆる 山かつの
おとろのかみも あふひかけけり

▽ [けふくれば] 4-26 堀河百 360、▽ [けふく
れば] [あふひかけたり] 3-106 散木 210、▽ [け
ふくれば] [あふひつけたり] 2-16 夫木 2511

(608:け7) けふも又 かくやいふきの さしも草
さしも我のみ もえやわたらん

▽ [さらばわれのみ] 1-8 新古今 1012、10-181
歌枕名 6235、▽ [いかにいぶきの] [さらばわ
れのみ] 5-277 定十体 194

(609:け8) 今朝よりは いとゝおもひを たきまして
なけきこりつむ あふさかの山 (新古今 / 高倉院)

1-8 新古今 1163、2-12 月詣 568、10-181 歌枕名
5717

(610:け9) けふくれと あやめもしらぬ たも
とかな むかしをこふる ねのみかゝりて (新古
今 / 上西門院兵衛)

1-8 新古今 770、2-10 続詞花 394

(611:け10) けふこすは 見てやゝまゝし 山里の
紅葉も人も つねならぬ世に (同 / 公任)

1-8 新古今 800、3-80 公任 218、10-181 歌枕名
1590、▽ [みずやあらまし] 2-10 続詞花 904、▽ [け
ふ見ずは] [あすやあらまし] 5-376 宝物 123

(612:け11) けふは又 しらぬ野原に 行暮ぬ
いつれの山か 月はいづらん (同 / 源家長)

1-8 新古今 956、5-201 北野合 28、5-235 新時代
245、▽ [けふも又] 5-273 続歌仙 75、▽ [今日
も又] [行暮れて] 10-123 新三撰 336

(613:け12) けふまては 人をなけきて 暮にけり
いつ身のうへに ならんとすらん (同 / 大江嘉言)

1-8 新古今 1787、▽ [やみぬめり] 3-70 嘉言 64

(614:け13) けふはもし 君もやとふと なかむれは
また跡もなき 庭の雪かな

▽ [ながむれど] 1-8 新古今 664、3-122 林下
173、▽ [今朝はもし] 3-129 長秋 271

(615:け14) けふ毎に けふやかきりと おもへとも
又もことしに あひにけるかな (新古今 / 俊成)

[本文注記] 第三句「おもひしに」の「ひしに」
見せ消す。右傍書「へとも」あり。

▽ [をしめども] 1-8 新古今 706、5-197 千五百
2093

(616:け15) けふすきぬ 命もしかと おとろかす
入あひのかねの 聲そかなしき (同 / 寂蓮法師)

1-8 新古今 1955、10-10 法門百 83、10-177 定家八
1793、▽ [けふくれぬ] [音ぞかなしき] 5-223
時代不 202

(617:け16) けふはいとゝ涙にくれぬ にしの山
おもひいり日の かけをなかめて (新古今 / 伊
勢大輔)

1-8 新古今 1974、3-86 伊大輔 135、7-32 伊大輔
103

(618:け17) けふといへは もろこしまても 行春を
みやこにのみと をもひけるかな (新古今 / 俊成)

1-8 新古今 5、3-129 長秋 483、6-31 題林愚 4

(619:け18) けふこすは 明日は雪とそふりなまし
きえずはありとも 花と見ましや (伊勢物語 / 業平)

1-1 古今 63、2-4 古六帖 4210、3-6 業平 3、5-311
八雲 41、5-320 竹園抄 36、5-415 伊勢語 29、10-
177 定家八 161、▽ [明日は雪とや] 5-332 悦目抄
81、▽ [きえずはありと] 7-2 業平 22、5-302
歌色葉 71

(620:け19) けふたにも 庭をさかりに うつる花
きえずはありとも 雪かとも見よ (新古今 / 太上天王)

▽ [庭をさかりと] 1-8 新古今 135、3-130 月清
1017、5-399 家長記 110、10-177 定家八 162

(621:け20) けふは猶 あやめのねさへ かけそ

めて みたれそまさる 袖のしら玉

▽ [けふは又] [かけそへて] 1-8 新古今 221、
3-129 長秋 126

(622:ふ1) ふりにけり 時雨は袖に 秋かけて
いひしはかりを 待とせし間に (新古今/俊成)
1-8 新古今 1334、5-194 水無瀬 132、5-195 若宮建
24、5-196 桜宮合 24、5-277 定十体 39、5-278
自讃歌 77、5-345 心敬私 36、10-123 新三撰 216、
▽ [ふりにける] 4-19 俊成女 204

(623:ふ2) 古郷を 出しにまさる 涙かな 嵐の
まくら 夢に別れて (拾遺愚抄/定家)
1-13 新後撰 583、2-16 夫木 15378、3-133 拾遺
愚 875、5-175 六百番 899、5-183 三百六 595、
6-12 別兼作 204、6-31 題林愚 7231、8-34 雲玉
502

(624:ふ3) 二つなき ものとおもひしを みな
そこに 山のはならて いつる月かけ(古今/貫之)
1-1 古今 881、2-3 新撰和 231、2-4 古六帖 326、
5-336 愚問賢 16、▽ [ものとおもふを] 3-19 貫之
800、10-212 源氏注 554

(625:ふ4) 吹まよふ み山おろしに 夢さめて
涙もよほす 瀧のおとかな
5-249 物語合 139、5-250 風葉 1300、5-421 源氏
49、▽ [たきのおとかふ] 10-183 高良玉 168

(626:ふ5) ふきまかふ 野風をさむみ 秋はきの
うつりも行か 人のこゝろの(古今/雲林院のみこ)
▽ [吹きまよふ] 1-1 古今 781、10-177 定家八 1293

(627:ふ6) 古郷は 見しおもかけも やとりけり
ふはの関屋の 板間もる月 (月清抄/後京極)
▽ [ふるさとに] 3-130 月清 383、5-175 六百番
1007、▽ [故郷に] [うつるらん] 5-178 後京極 143

(628:ふ7) ふしなれぬ はまゑかねの 岩まくら
袖うちぬらし 帰るうき波 (拾遺愚抄/定家)
3-133 拾遺愚 1480、4-34 洞院百 1514、▽ [か
へるうら波] 1-19 新拾遺 829

(629:ふ8) 古郷に 帰るかりかね さよふけて
雲ちにまかふ 聲そきこゆる
▽ [雲ちにまよふ] [声きこゆなり] 1-8 新古今

60、10-177 定家八 84

(630:ふ9) ふしておもひ おきてなかむる 春雨に
花の下ひも いかにとくらん (新古今/—)
1-8 新古今 84、2-4 古六帖 455、5-293 童蒙 675、
10-177 定家八 88

(631:ふ10) ふもとまで 尾上のさくら 散こすは
たなひく雲の 見てや過まし
▽ [たなびく雲と] 1-8 新古今 124、10-177 定家八
171

(632:ふ11) 古郷の 花のさかりは 過ぬれと
おもかけさらぬ 春の色かな
▽ [春の空かな] 1-8 新古今 148、5-248 和一字
901、10-177 定家八 178、▽ [おもがはりせぬ]
[はるのそらかな] 3-96 経信 46

(633:ふ12) 吹むすふ 風はむかしの 秋なから
ありしにもにぬ 袖の露かな (新古今/小町)
1-8 新古今 312、5-329 桐火桶 210、10-177 定家
八 290、▽ [ありしにもあらぬ] 3-5 小町 95

(634:ふ13) ふかゝらぬ とやまの廬の ね覚たに
さそな木の間の 月はさひしき (同/後京極)
1-8 新古今 395、3-130 月清 1120、5-189 撰歌合
61、6-27 六華集 743、10-206 歌林良 281

(635:ふ14) ふくるまで なかむれはこそ 悲しけれ
おもひもいれし 秋の夜の月 (同/式子内親王)
1-8 新古今 417、10-123 新三撰 73

(636:ふ15) 吹まよふ 雲をわたる はつ鴈の
つはさにならす よもの秋風 (同/俊成)
4-19 俊成女 192、▽ [夜はの秋風] 1-8 新古今
505、▽ [かりがねの] 10-177 定家八 376

(637:ふ16) 古郷は ちる紅葉ゝに うつもれて
軒のしのふよ あき風そふく (新古今/俊頼)
[本文注記] 作者名は「俊成」の「成」を墨で消し、
右に「頼」と記す。
▽ [のきのしのぶに] 2551-8 新古今 533、2-10
続詞花 272、3-106 散木 560、5-272 中古六 37、
5-307 近代秀 7、5-326 愚見抄 13、5-329 桐火桶
160、5-335 井蛙 14、6-27 六華集 913、6-31 題林
愚 3208、10-177 定家八 453、▽ [散る紅葉ばと]

[軒のしのぶに] 10-185 三百六 275

(638:ふ 17) ふかき夜の 窓うつ雨に 音せぬは
うき世を軒の 忍ふなりけり (同/寂蓮法師)

1-8 新古今 1949、4-10 寂蓮 97、5-383 十訓 133

(639:ふ 18) ふみそむる 恋路の末に あるものは
人のこゝろの 岩木なりけり

1-9 新勅撰 685

(640:ふ 19) 冬の来て 山もあらはに 木葉ふり
のこる松さへ 峯にさひしき (新古今/成茂)

1-8 新古今 565、5-202 春日合 26、5-273 続歌仙
83、5-399 家長記 19、▽[木のはふる] 6-31 題
林愚 5060、▽[山はあらはに] 6-27 六華集 974

(641:ふ 20) ふけ行は けふりもあらし しほかまの
うらみなはてそ 秋の夜の月

1-8 新古今 390、3-131 拾玉 3704、4-32 正治後
1031、5-183 三百六 308、10-123 新三撰 163、
10-181 歌枕名 7286

(642:こ 1) ことしより おしき命の ゆへや何
花の春より 月の秋まで (拾玉抄/慈圓)

▽[ことしばかり] [秋の月まで] 3-131 拾玉 4425

(643:こ 2) 九重の 花のうてなを さためすは
けふりの下や すみかならまし (拾遺愚抄/定家)
3-133 拾遺愚 1198

(644:こ 3) これやたれ ありしやそれと おもふ
にも 心をみつる ふてのあとかな (長秋抄/俊成)
▽[心をみだる] 3-129 長秋 342

(645:こ 4) 苔の下に うつまぬ名おは 残すとも
はかなのみちや しきしまの哥 (拾遺愚抄/定家)
3-133 拾遺愚 1683、▽[のこせども] 2-16 夫木
17363

(646:こ 5) 恋せしと みたらし河に せしみそき
神はうけすも なりにけるかな (伊勢物語/業平)
5-415 伊勢語 119、2-3 新撰和 356、2-5 金玉 41、
5-285 新髓脳 3、5-291 俊頼髓 101、5-294 奥儀
86、5-300 六陳状 217、5-301 古来風 273、5-302
歌色葉 62、5-307 近代秀 94、5-335 井蛙 7、10-
177 定家八 1242、10-180 五代枕 1164、10-212

源氏注 411、10-212 源氏注 634、10-212 源氏注
946、10-212 源氏注 963、▽[神はうけずぞ]
[なりにけらしも] 1-1 古今 501、5-299 袖中抄 552、
10-181 歌枕名 129

(647:こ 6) 理を しらぬ涙の つらきかな あは
すは人に 別ましやは
未詳

(648:こ 7) 木つたえは おのか羽かせに ちる物を
たれにをほせて こゝらなくらん (古今/そせい)
▽[ちる花を] 1-1 古今 109、2-4 古六帖 4053、
5-295 袋草紙 742、5-248 和一字 1083、5-291
俊頼髓 197、10-189 蒙求平 209、10-206 歌林良
22、10-206 歌林良 326、▽[ちるはなを] [た
れによそへて] 3-9 素性 15、▽[うぐひすの] [ち
る花を] 2-4 古六帖 4399

(649:こ 8) この里は すみた河にも 程とをし
いかなる鳥に 都ことはまし
▽[すみだがはらも] 1-11 続古今 936、5-231
大歌合 19、7-94 瓊玉 441、7-95 柳葉 214、10-
181 歌枕名 5501、▽[すみだ河原も] [とほけ
れば] 6-31 題林愚 8692

(650:こ 9) 心あらは 吹すもあらなん よひ
へに 人まつやとの 庭の松風 (新古今/慈圓)
1-8 新古今 1311、3-131 拾玉 1663、5-175 六百番
934、5-177 慈鎮合 22、10-177 定家八 1276、▽[ふ
るすもあらなん] 6-31 題林愚 7473

(651:こ 10) こゝろには わするゝ時も なかりけり
みよのむかしの 雲の上の月 (同/左近中将公衡)
[本文注記] 第二句「わするゝひまも」の「ひま」
見セ消チ。右傍書「時」あり。結句「雪の夜の月」
の「雪」「夜」見セ消チ。左傍書「雲」「上」あり。
1-8 新古今 1511、10-177 定家八 1612

(652:こ 11) 恋わひて うちぬる中に 行かよふ
夢のたゝちは うつゝならなん (古今/としゆき)
1-1 古今 558、2-4 古六帖 2031、3-8 敏行 9、10-
177 定家八 1217、▽[ゆきかへる] 2-2 新撰万
209、▽[うつつなるらむ] 5-4 寛平后 173

(653:こ 12) こひしくは みてもしのはん 紅葉ゝを
ふきなちらしそ 山おろしのかせ (同/—)

1-1 古今 285、2-3 新撰和 56、2-4 古六帖 427、
5-274 秀歌大 82、10-177 定家八 460

(654:こ13) 恋しとは たか名付けん ことの葉そ
しぬとそたゝにいふへかりしを(古今/ふかやふ)
〔本文注記〕第三句「ことの葉そ」の「こと」
の右に「イなら」あり。結句「いふへかりしを」
の「しを」の右に「イける」あり。

▽〔いふべかりける〕2-4 古六帖 2005、▽〔こ
とならむ〕〔いふべかりける〕1-1 古今 698、▽
〔たが名づけける〕〔事ならん〕〔いふべかりける〕
3-39 深養父 30

(655:こ14) こひすてふ 我名はまたき たちにけり
人しれすこそ おもひそめしか(百人一首/壬生
忠見)

1-3 拾遺集 621、1-3' 拾遺抄 228、5-28 天徳合 40、
5-166 俊成合 100、5-235 新時代 87、5-275 百人秀
42、5-276 百人首 41、5-293 童蒙 873、5-295 袋草
紙 309、5-301 古来風 374、5-388 沙石 63、10-177
定家八 883

(656:こ15) こからしに 吹あはすめる 笛のねを
ひきとゝむへき ことの葉もなき(源し/一)

〔本文注記〕作者名「源し」を墨で消す。

▽〔ことの葉ぞなき〕5-421 源氏 13

(657:こ16) 恋しさはおなしこゝろにあらずとも
今夜の月を 君見さらめや

1-3 拾遺集 787、1-3' 拾遺抄 363、3-24 中務 190、
3-25 信明 113、5-267 三十六 99、5-291 俊頼髓 45、
5-291 俊頼髓 189、5-302 歌色葉 66、5-311 八雲
82、5-330 和歌肝 12、5-331 和歌大 3、5-332 悦目
抄 36、7-10 中務 272、10-177 定家八 1379、▽
〔こよひのつきに〕5-266 三十人 82

(658:こ17) 心あてに それかとそみる しら露の
ひかりそへたる 花のゆふかほ(源し/夕かほ)

▽〔ゆふがほのはな〕5-421 源氏 26、5-249 物
語合 19、6-27 六華集 1446、10-102 源氏合 68、
10-213 六花注 183、▽それとぞ見ゆる 夕顔の花
10-185 三百六 143

(659:こ18) こむといひて 来る夜そ物の おも
わるゝ たえんといひて たえんかなしさ
未詳

(660:こ19) 心ほと おもへはつらき 物なれや
こゝろとものおもふとおもへは

▽〔心こそ〕5-128 艶書合 48

(661:こ20) こゝろにも あらてうき世になか
らへは 恋しかるへき 夜半の月かな(百人一首
/三條院御哥)

1-4 後拾遺 860、5-275 百人秀 54、5-276 百人首
68、5-301 古来風 476、5-354 栄花 120、10-177
定家八 1604、▽〔あらでこの世に〕5-235 新時代
176、5-295 袋草紙 189

(662:こ21) こぬ人を まつほの浦の ゆふなきに
やくやもしほの 身もこかれつゝ(拾遺愚抄 百人一
首/権中納言定家)

〔本文注記〕作者名「権中納言宗家」の「宗」
見せ消す。右傍書「定」あり。

1-9 新勅撰 849、3-133 拾遺愚 2568、5-213 建保
合 182、5-216 定家合 124、5-225 両卿撰 75、
5-275 百人秀 100、5-276 百人首 97、5-319 和歌
口 268、5-335 井蛙 68、5-335 井蛙 232、5-345
心敬私 58、10-123 新三撰 197、10-179 正風体
58、10-181 歌枕名 8795

(663:こ22) こぬ人を 松の葉にふる しら雪の
きえこそかへれ あはぬ物ゆへ

▽〔あはぬおもひに〕5-416 大和 218、▽〔し
ら雪を〕〔こふる思ひに〕2-4 古六帖 724、▽〔松
のえにふる〕〔くゆる思ひに〕1-2 後撰 851、▽
〔まつのえだに〕〔ふる雪の〕〔あかぬおもひに〕
3-42 元良 108

(664:こ23) 恋しきに うきもつらきも わすられて
心なき身になりけるかな(長秋抄/俊成)

3-129 長秋 77、4-30 久安百 878

(665:こ24) こひしさに けふそ尋ぬる おく山の
日影の露に 袖はぬれつゝ

1-8 新古今 1154、10-177 定家八 1058

(666:こ25) こたへする 人なき山の よふことり
ひとりなきてや 春を過らん

4-26 堀河百 214、6-31 題林愚 1336

(667:こ26) 恋をのみ すまのうら人 もしほたれ
ほしあえぬ袖のはてをしらはや(新古今/後京極)

1-8 新古今 1083、3-130 月清 770、4-31 正治初
474、10-181 歌枕名 4274

(668:こ 27) こひしとも いわはこゝろの ゆく
へきに くるしや人め つゝむおもひは (新古今
/ 近衛院)

1-8 新古今 1090、2-9 後葉 306

(669:こ 28) 心あてに おらはやおらん はつしもの
をきまとはせる しらきくの花 (古今/みつね)

1-1 古今 277、2-3 新撰和 100、2-4 古六帖 3744、
2-5 金玉 32、2-6 和漢朗 273、5-264 和十種 38、
5-266 三十人 28、5-267 三十六 28、5-268 深窓秘
55、5-275 百人秀 25、5-276 百人首 29、5-301 古
来風 252、5-308 詠歌大 48、6-12 別兼作 420、
6-16 和漢兼 786、7-5 躬恒 152、10-177 定家八
435、10-212 源氏注 574、10-212 源氏注 1064

(670:こ 29) これもまた 長き別に なりやせん
暮をまつへき いのちならねは (新古今/知家)

1-8 新古今 1192、10-123 新三撰 280

(671:こ 30) 恋しつむ 命はなをも おしきかな
おなし世にある かひはなけれと

▽ [こひしなむ] 1-8 新古今 1229、2-12 月詣 398、
7-55 頼輔 69、▽ [こひしなむ] [別は猶も] 5-158
経盛合 116、5-165 治承合 86、10-176 言葉 35、▽ [恋
ひしなん] [かひはなくとも] 5-376 宝物 73

(672:え 1) えそしらぬ 今こゝろみよ 命あらは
我やわするゝ 人やとはぬと (古今/—)

1-1 古今 377、▽ [いまこころみん] 2-4 古六帖
2139、▽ [よし心みよ] 10-177 定家八 739、10-
212 源氏注 217

(673:え 2) えのこ草 たねはさま 〱 ある物を
あはのなるとは たれかいひけん

未詳

(674:え 3) ゑしのたく けふりはかりは さも
あらはあれ 雲みの月の 秋かせの空 (拾遺愚抄
/ 定家)

3-134 拾貝外 403

(675:て 1) てる月の 影にまかせて 小夜ちとり
かたむく方に うらつたうなり (月清抄/後京極)

1-12 続拾遺 419、3-130 月清 1318、5-178 後京極
99、5-183 三百六 523、6-31 題林愚 5455

(676:て 2) 手にむすふ 岩井の水の あかてのみ
春に別るゝ しかの山こえ (月清抄/後京極)

2-16 夫木 12444、5-197 千五百 572、6-11 雲葉集
272、▽ [春におくるる] [志賀の山ごえ] 5-345
心敬私 56、▽ [あかずのみ] [はなにわかるる]
[しがのやまごえ] 3-130 月清 819

(677:て 3) てる月の ひかりと友に なかれ来て
音さえすめる 山河の水 (拾玉抄/慈圓)

1-12 続拾遺 302、3-131 拾玉 439、5-177 慈鎮合
13、6-11 雲葉集 589、6-31 題林愚 3906

(678:て 4) [手にむすふ] [水にやとれる] [月
かけの] [あるかなきかの] [世にもすむかな]
5-359 保元 8、5-376 宝物 96、▽ [月かげは]
5-388 沙石 10、▽ [世にこそありけれ] 1-3 拾
遺集 1322、2-6 和漢朗 797、3-19 貫之 902、
5-295 袋草紙 122、5-212 源氏注 226、5-212 源
氏注 1689、▽ [水にうつれる] [よにこそあり
けれ] 2-4 古六帖 2458、▽ [水にうかべる] [よ
にこそありけれ] 1-3' 拾遺抄 575

(679:て 5) てる月も 雲のよそにそ 行めくる
花そこの世の ひかりなりけり (新古今/俊成)

▽ [光なりける] 1-8 新古今 1468、3-129 長秋 504

(680:て 6) てもたゆく ならすあふきの おきところ
わするはかりに 秋かせそふく (新古今/さかみ)

1-8 新古今 309、3-89 相模 256

(681:て 7) 手枕の すき間のかせも いとひしに
いかにそとはの 夜さむかるらん

未詳

3. 解題

本稿で採り上げた 180 首の歌のうち、歌頭が
「え」の歌は三首と少ない上、「ゑし」(674:え 3)
という「ゑ」から始まる歌が含まれている。歌頭
が「ゑ」の歌は、本歌集の他の箇所にも収められ
ていないことから、「ゑ」を「え」と区別せず、
一括してここに載せたものと見られる。

見せ消チや挿入記号、傍書などの注記は 12 箇所

所に見られる。このうち、(592:ま 11)においては「○」印が示されているが、これは前稿と同様に挿入記号として、初めの行と最終行をつなぐ意で用いられたものと考えられる。おそらく、ここでも当該面の最終行まで筆写してから、最初の一行目の欠落に気付き、最終行に補ったものと思われる。親本の喉（綴じ目）が開きにくかったことによるものか。

また、(547:く 26) (651:こ 10)の見セ消チを伴う傍書は、他出歌集の本文や作者と一致する。一方、「イ……」あるいは「……イ」という形式で示された異文傍書は5箇所あるが、他の歌集に見られないものが多い。

ただし、(537:く 16)「雲もかゝらぬ月をみるかな」の傍書は、『壬二集』において当該歌の二首後にある「松の戸をおし明方の山風に雲もかからぬ月をみるかな」(3-132 壬二集 1764)の下句が、誤って書き入れられたと思われる。第三句「山風に」が共通したため、目移りが起こったか。とすれば、当該箇所にも異文を書き入れるにあたり、出典歌集である『壬二集』そのものを参看した可能性が指摘できよう。

次に『新編国歌大観』に他出が唯一である歌をまとめると、次のようになる。

1-8 新古今	2 首	3-132 壬二	1 首
1-9 新勅撰	1 首	3-133 拾遺愚	5 首
3-129 長秋	1 首	3-134 拾貝外	2 首
3-130 月清集	3 首	5-128 艶書合	1 首
3-131 拾玉	10 首	5-421 源氏	2 首

前稿までと同様に、慈円の『拾玉集』を中心に『秋篠月清集』や『拾遺愚草』などのいわゆる六家集の用例が特に際立っている。

さらに集付を確認したい。集付の数をまとめると、以下のとおりである。

「新古今」	49 箇所	「長秋抄」	5 箇所
「月清抄」	15 箇所	「伊勢物語」	4 箇所
「拾玉抄」	14 箇所	「源し」	3 箇所
「古今」	12 箇所	「山家抄」	3 箇所
「拾遺愚抄」	12 箇所	「百人一首」	3 箇所
「壬二抄」	6 箇所		

作者名は122箇所に記されている。ほぼ正確であるが、誤りもある。(622:ふ 1)の歌は、作

者を「俊成」としているが、「俊成女」である。また、(593:ま 11) (595:ま 14)の作者はそれぞれ「冷泉院」「白川院」とされるが、「後冷泉院」「後白河院」が正しいと思われる。これらの作者名はいずれも作者名の一部「女」や「後」が欠落する誤りであるという点で共通している。

次に、物語和歌をみたい。『伊勢物語』の歌は4首あり、そのうちの1首(542:く 21)は、前稿で挙げた(452:む 11)の返歌である。この歌の作者は「有常むすめ」となっているが、前稿でみたように『冷泉家流伊勢物語抄』などの古注釈に依ったことを窺わせる。

そのほかの3首はいずれも「業平」詠とされている。(600:ま 19) (619:け 18)は、それぞれ『新勅撰集』『古今集』に、「業平」が作者であることが明記され、また、(646:こ 5)は、『古今集』では「題しらず」「読人しらず」の歌群に配されているが、『伊勢物語』では「在原なりける男」(第六十五段)と、業平であることを暗示している。

『源氏物語』の3首については、(656:こ 15)が「帚木」、(553:や 2)が「夕顔」、そして、(524:く 3)が「末摘花」と、いずれも物語の冒頭近くの巻の歌となっている。この点も、前稿までと同じ傾向である。

最後に、『新編国歌大観』の範囲では他出が確認できない歌は、(603:け 2) (604:け 3) (648:こ 6) (659:こ 18) (673:え 2) (681:て 7)の6首ある。「け」の歌に連続して見られる点、「え」「て」の歌はそれぞれ歌群末尾に配されている点に留意しておきたい。

附記

本稿は、「伝統文化形成に関する総合データベースの構築と平安朝文学の伝承と受容に関する研究」(同志社大学人文科学研究所第18期研究会第17研究、および科学研究費助成事業基盤研究(C)課題番号25330403、いずれも平成25～27年度)における研究の一部である。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2とともに、竹田正幸氏(九州大学大学院システム情報科学研究院)作成の文字列解析器“e-CSA Ver.2.00”を使用した。